

春風秋霜

6月号

令和3年6月1日
島田市教育委員会だより
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

1 地域探訪について

5月の中旬に地域探訪する中学生（一年生）に会いました。六合中学校と金谷中学校の2つのグループと短い時間でしたが話すと、大変礼儀正しくはつらつとした姿に感心しました。先生方の事前指導が生きていると思いました。

そのうちの1つのグループは、敬満神社を見学し、蓬莱橋を渡り、大井神社を参拝してきたということでした。敬満神社まで足を伸ばしたということは、事前学習をしていると思い、「敬満神社は平安時代から続く、島田では大変古い神社」と話すと驚いていました。国から保護された格式の高い神社ということも知らないようでした。

島田市を知るために行う地域探訪も、知識の有無によって質が変わると思います。教育委員会発行の「わたしたちの島田市」にも記載されているし、地域の方から情報を集めることもできます。

これから地域探訪を計画している学校も、事前の情報収集と当日出会った地域の方とのコミュニケーションを大切にして欲しいと思います。生の声には新しい発見や感動があると思いますし、その子なりの学びがあると思います。

2 放課後子供教室やしまだガンバがスタートしました

初倉地区放課後子供教室（フレンズ）が、5月19日（水）に23人の小学生が参加してスタートしました。年間計画を見ると、和菓子作りやシャボン玉遊び、クリスマスケーキ作りなど、楽しい企画がたくさん予定されていました。

サタデーオープンスクールも始まっていますし、しまだガンバも5月22日（土）に始まりました。これ以外にも地区で行われる活動もあるので、島田市ではたくさんの体験活動が行われています。このような活動は、学校ではできない経験を増やすだけでなく、知らない友達と関わることもできるので、子供の世界は広がります。体験を通して学ぶことは多いと思うので、子供たちには積極的に参加して欲しいものです。

3 学校訪問をして

5月17日（月）から今年度の教育委員の学校訪問がスタートしました。最初の訪問校である金谷中学では、端末を使った授業が多くの学級で行われていました。キュビナ（学習用ソフト）を使った授業において、生徒は個々の能力に応じた問題を解いていました。答を間違えると類似問題が出されるこのソフトは、躓きの解消に効果的だと思いました。教師用端末には、生徒全員の正誤状況が表示され、解決方法が分からない生徒には、「支援が必要です」のメッセージも表示され、教師も効果的に支援ができるようになっていました。

金谷小学校では、高学年でタブレットを使う授業が見られましたが、中学校と比べ教師



と子供、子供同士の話し合いもあり、小学生らしいコミュニケーションも大切にした授業になっていました。

タブレットなど教育機器は、学習効果を上げるために使うのであって、使うことが目的ではありません。様々な場面で活用して欲しいと願っていますが、使う目的を明確にすることも大切だと思います。

伊太小と島一小を訪問すると、北部4小学校との統合を見据え、社会見学を合同で行うなど交流活動も計画されていました。子供たちの不安を少しでも解消するためには、多様な交流と共に、大きな集団の中で発言できる力を育てることも大切だと思います。

4 スリランカについて

スリランカ女性が入管施設で亡くなった悲しいニュースが話題になっています。セイロンティーの産地としてスリランカを認識している人は多いと思いますが、第二次世界大戦後の日本に大きな影響を与えた国として認識している人は少ないと思います。

戦後に行われたサンフランシスコ講和会議において、セイロン代表として会議に出席していたジャヤワルダナ大蔵大臣（のちにスリランカ第2代大統領）は「憎悪は憎悪によって止むことはなく、慈愛によってのみ止む」という仏陀の言葉を引用して、日本への戦時賠償請求を放棄し、他の国にも請求放棄を呼びかけました。

日本を4分割してソビエト・アメリカ・イギリス・中国の支配下に置くという意見も出されたこの会議において、彼の演説が会議の流れを変え、今の日本があるのです。また、彼は亡くなる時、自分の角膜の1つをスリランカ人に、もう1つを大好きな日本人にと言い残し、その遺言は実現されているそうです。こんな事実を知っていると、スリランカに関わる事象がもっと身近になると思います。歴史を知ることは大切です。

肘かけ椅子

鈴木 龍彦 教育総務課長

「どうなる 秋祭り」

地域の祭典役員会に出席した。内容は、祇園祭と秋の本祭りの運営について。祭典当屋組として、既に元旦祭と建国祭の二つの神事を終えている。進行役として携わったが、出席人数を制限したことにより前回（6年前）に比べ短時間で終えた。

会議では、マスクをしての流し踊りは苦しい、それ以前に踊りの練習が密になる、コロナ禍はこの地域にも及んでいる等の意見により、規模縮小に傾いた。

去年は、屋台巡行や流し踊りを中止としたことから、地域の中には、今年はやりたい、やらないと次に繋げていけなくなる。そんな危機感を持つ人もいる。

かなり前だが、社会教育委員からの提言書の中で、地域力を高めるには、絆の醸成が大切。その手段として地域の祭りへの参加が推奨されていた。

責任感を育む伝承や文化を持つことの誇り。とても重要なこと。しかし、今の祭りが伝統文化になるほどの意義を持っているか。と疑問視する者も多い。祭りは、単に楽しければいいのだ。という声もある。

屋台巡行中止の意見を簡単に受け入れている私は、この行事に誇りが持てているのだろうか。コロナ禍には自問の病も含まれているようだ。病氣平癒と開運除災を謳う京都祇園祭の山鉦巡行の中止にも、ある意味疑問が残る。